

1. 問題

報告者は、メディアの認知心理学的な研究を行ってきた（たとえば、高橋(2006)、高橋(2007)、高橋・山本(2002)など）。高橋(2006)は「メディア」という用語を、(1)媒介・媒質、(2)道具、(3)形式・様式、(4)意味内容・コンテンツ、という4つの側面から捉えた。本プロジェクトのテーマである「人工物」とはこの内の「道具」ということと同義である。ただし、高橋(2006)では、道具について、単なる物理的な道具ばかりでなく、心理的な道具ということにも触れている。心理的道具とは、もともとはVygotsky(1979)の概念である。Vygotskyは、心理的道具の代表例として、言語を上げている。つまり、他人とコミュニケーションを取るために、あるいは自分の思考のために、人間は言語を心理的道具として使用している、という訳である。Vygotskyはその他に、各種の記号や地図、記憶するために指にひもで結び目を付けておく、といった例を挙げている。

高橋(2007)は、説明という心理的な過程を、各種のメディアがネットワーク的に関与する複雑系として捉えた。そこで、「人工物」についても同様に考えることができる。人工物は単独で存在しているのではなく、他の人工物とネットワーク的な関係において存在しているばかりか、人間によって使用される際には、心理的道具としても使用される、あるいは別の心理的道具と一緒に使用される、ということである。こうして、人工物のネットワーク性や重層性ということを導くことができる。

さて、報告者は、本プロジェクトにおいて、本作りの現場での人工物発達学を研究テーマとしたが、その動機や背景は、以下の通りである。

当然のことであるが、本も人工物の1つである。本は、その内容を読者に伝えるための人工物である。一方で、現代のICT技術の発展に伴い、本というメディア・人工物のあり方が変わりつつある。つまり、本という物理的な形にしなくとも、電子的な情報として流通することが可能になってから久しい。そこで、現在の本作りの現場についてあらためて調査しておく必要があると判断した。

本作りの現場には、さまざまな立場の人間が関与している。まず、本を実際に執筆する執筆者、複数の執筆者からなる原稿を構造化し1つの本としてまとめ上げる編者、本の内容をチェックする監修者、実際に本という形に仕上げるための裏方的な立場であるが、出版社に在籍している編集者といった人間が関与している。さらに編集者の背後には、出版社のスタッフ、印刷所、流通に関わる書籍店、営業に関わる宣伝会社、学術的な書籍であれば、専門学会、書評の関連でマスコミなど、関与している。そして、将来の読者も当然関与することになる。こうして、本作りの現場を調査することは、このようにさまざまな立場の人間の間で行われるコミュニケーションの実際を対象とすることになり、本プロジェクトの題材としてばかりか、メディアの認知心理学研究の事例としても最適であると判断した。

今回調査対象とした本は、認知心理学の分野でコミュニケーションを扱った本であり、本プロジェクトの今年度の共通テーマである「伝える」ということに直接関連している。そこで、今回の調査対象としてふさわしいであろうという判断も働いた。報告者は、別に「科学コミュニケーション」に関するプロジェクトにも入っている（三輪・高橋(in press)）。科学をテーマとした本作りの現場に関する研究を行うことは、本作りに関する異領域、異分野、異なる立場の人間の間でのコミュニケーションに関する研究という意味で、「科学コミュニケーション」研究としても有意義であると考えた。

2. 目的

本作りの現場についての調査や報告は、ジャーナリズムからのものが大部分である。報告者の研究分野である、認知心理学や認知科学から、本作りの現場にアプローチしたものは、報告者の知る限り存在していない。

以上から、本作りの現場に対する最初の研究として、本研究を位置づけることができると判断した。そこで、まずは、現場で起きていること、つまり事例の収集を行い、事例を記述することから研究を開始する必要があると考えた。

具体的な、研究課題としては、

- ・本作りがどのように行われているのか？
- ・その本作りの過程において、どのような人工物が使われているのか？
- ・その人工物の使用は、本作りの過程においてどのように変化（発達）していくのか？

という観点から、事例を収集することにした。

今回対象とした本は、編集本であり、複数の編者が存在している。編者は同時にある章の執筆者でもあるのでここでは編著者と記す。そこで、編著者と編著者、編著者と編集者（出版社）、編著者と執筆者、編集者と執筆者、というように、さまざまなコミュニケーションの形態が存在している。そこで、

- ・コミュニケーションの形態の違いによって、使用される人工物とその変化が異なるのか？

という観点も、取り上げることにした。

以上から、本研究の目的は、本作りの現場において、その過程において使用される人工物とその変化を記述すること、その上で、その過程について仮説を生成することである。

3. 方法

本作りの過程におけるイベントを、人工物の観点から収集し分析するという最初の研究という点から、本研究においては、本作りに関わった人々へのインタビュー調査を行うこととした。インタビュー調査における、データの収集ならびに、分析方法は以下の通りである。

3.1 データ収集方法

・インタビュー調査では、クリティカルインシデント法を応用した半構造化インタビューを採用する。クリティカルインシデント法とは、主に、事故分析において使用されてきた方法であり、事故という出来事に関連して、当事者の失敗経験を、その文脈に関する情報とともに想起してもらうものである。本研究では、本作りの過程におけるイベントを、当事者が失敗とか問題とか感じていないことも含めて、そこで使用された人工物に注目してもらい答えてもらうこととした。インタビュー協力者の回答に応じて、質問の内容が変わっていく、半構造化インタビューを採用した。以下、インタビューガイドおよびインタビュー協力の同意書については、三輪・高橋(in press)での方法を参考にして、本研究の対象にあわせて報告者の責任で修正して作成した。

・インタビューガイドを作成し、事前に調査の概要を伝える。インタビューガイドは、インタビュー協力者に応じて内容を変えて作成した。すなわち、インタビュー協力者が、編著者、編集者（出版社）、執筆者の場合に応じて、3種類作成した。具体的には、付録1・2・3を参照のこと。なお、これらのインタビューガイドにおいては、調査対象となった書籍名について、「(書籍名)」と記している。具体的な書籍名を公開することはできないためである。

・インタビュー所要時間は一人、最大120分とした。本作りの過程でのイベントとして各種各様のものがあると想定されたので、所要時間を通常のインタビューよりも長く取っている。

・インタビュー調査を開始する前に、インタビューの進め方、データの記録、得られたデータの扱いに関して、インタビュー調査協力の同意書に署名の上、報告者と協力者とで一部ずつ交換した。調査協力の同意書は、付録4を参照のこと。

- ・インタビュー場所は、インタビュー協力者の所属機関とした。すなわち、訪問調査である。
- ・インタビューは、インタビュー協力者の許可が得られてから、ICレコーダによって録音した。
- ・インタビュー実施後、できるだけ早い時期に、インタビューメモを作成した。これは、インタビュー協力者に確認を求めているわけではない。あくまでも報告者の記録のために作成したものである。

3.2 データ分析方法

- ・記録した音声データの書き起こしを行う。
- ・書き起こしの内容分析を行う。まず、テキストデータをイベント毎に分割する。
- ・1つのイベントの構造を分析する。
- ・収集したイベントを類型化し、その概念枠組みを構築する。

3.3 インタビュー協力者と調査期間・場所

ある1冊の書籍について、その編集者（出版社）、編著者、執筆者を対象とした。今年度は、編集者1名、編著者2名、執筆者1名へのインタビューを実施した。編著者2名については、第1編著者を編著者1、第2編著者を編著者2と区別する。執筆者1名については、来年度以降予定している（後述）執筆者と区別するために、今後は、執筆者〇と記す。実施期間は、平成19年12月19日（水）から21日（金）であった。19日に編集者20日に編著者2名、21日に執筆者、へのインタビューをそれぞれ実施した。インタビューは全て関西地方において実施した。

4. 結果と考察

現在、インタビューの書き起こしを行っている最中であり、内容分析に入っていない。そこで、主に、インタビュー実行時のインタビュー協力者の様子やインタビューメモに基づいて、分析の観点、枠組みとなりうるであろうことを上げてみたい。

4.1 インタビュー実施時の協力者の様子から

インタビューに回答する際、すなわちイベントを想起する際に利用する手がかりに、協力者によって違いが見られた。これは、協力者の個人差ばかりでなく、本作りでの実際の作業の内容や人工物も関連していると思われる。

- ・編集者（出版社）：主に記憶に基づいて回答

本作りの過程におけるイベントとしては、実物（印刷された原稿や文書）という人工物を使用しているものが多い。編著者や執筆者との連絡には、電子メールと郵便・宅配便による文書の通信とを使用している。

- ・編著者1：主にラップトップPCに保存されている電子メールに基づいて回答

対象とした本において、最も責任ある立場である人物だが、他の人物との連絡は基本的には電子メールで行っていた。原稿が上がってきて、編集作業に移ってからは、印刷された原稿や文書での作業も多く行ってきた。

- ・編著者2：主に当該の本に関わる資料、文書、時々電子メールに基づいて回答

基本的には、資料や文書に基づいて回答した。日時など微妙な問いに回答する際には、自分のデスクトップPCに残された電子メールを確認することも行った。

・執筆者O：主にラップトップPCに保存されている文書ファイルに基づいて回答

執筆の際に使用したラップトップPCに、執筆の途上のファイルを保存していた。執筆の際には、まずは裏紙に筆記具でメモを取り、ある程度まとまったらPCのワープロで電子ファイルに入力しすぐに印刷しておく、その印刷された用紙にまたメモを付け足していく、というようにして原稿を完成させた。

4.2 本作りの現場で使用されている人工物について

4人のインタビュー協力者が、本作りの過程で使用した人工物としては、以下が上げられた。

- ・据え付け電話
- ・携帯電話
- ・PC
- ・電子メール
- ・文書

印刷された文書自体

文書のやり取り（郵送や宅配便）

また、人工物ではないが、対面コミュニケーションという形態も取られていた。携帯電話は、緊急時に出先から連絡する必要がある時に使用される以外は、据え付け電話が使用されていた。本作りの過程では、一番最初の執筆依頼、初稿戻し、執筆者紹介文提出、というような大きなイベントの際に、郵送や宅配便での文書のやり取りという人工物が使われるが、同時に電子メールでの連絡も行われる。

4.3 興味深いイベント

・編著者が最初に本の企画書を編集者に送った際には、すぐに編集者（インタビュー協力者の上司である出版社の編集長）が編著者1の所属先に出向き、編著者2も集まって、3者による対面での打ち合わせが行われた。いわゆる企画会議である。インタビュー協力者である編集者によると、丁寧な本作りの場合には、執筆者も含めた対面での企画会議を実施したいとのことであった。実際の作業が始まってからは、この本の担当は、編集者に代わった。

・編著者の2人は、基本的には電子メールによって、企画内容について検討していった。原稿が上がりはじめ編集作業に入ってから、実際の文書のやり取りを多く行った。また、別件で対面で会う機会を利用して、文書のやり取りを行ったり、打ち合わせを行うこともあった。

・編著者2によると、ある執筆者から電話相談があったとのことである。その相談内容は、単なる電子メールでのコミュニケーションでは解決できなかったことだと、相談を受けた編著者2は認識している。その後、その問題は解決した。この執筆者については、今年度インタビューを実施した執筆者ではないし、来年度もインタビューを予定している（後述）執筆者でもない。

5. 今後の予定

インタビューの書き起こしを完成させた後、内容分析を行って、本作りの過程におけるイベントについてパターン分けのためのカテゴリーを作る。その上で、イベントを記述するための概念枠組みを構築していく予定である。

来年度、今年度対象にしたのと同じ書籍について、別の執筆者へのインタビュー調査を追加して、全体として結果をまとめる予定である。

6. 引用文献

三輪眞木子・高橋秀明(in press). 他領域の研究者・学生との科学ミスコミュニケーション事例調査:中間報告、総合研究大学院大学葉山高等研究センタープロジェクト「人間と科学」科学におけるコミュニケーション 平成19年度中間報告

高橋秀明(2006).マスメディア、マルチメディアって何だろう? ―メディアの認知心理学―、太田信夫(編) 記憶の心理学と現代社会 有斐閣 pp.81-90.

高橋秀明(2007).説明表現とメディア、比留間太白・山本博樹(編) 説明の心理学:説明社会への理論・実践的アプローチ ナカニシヤ出版 pp.94-109.

高橋秀明・山本博樹(編)(2002).メディア心理学入門 学文社

Vygotsky, L. S.(1979).The instrumental method in psychology. In J. V. Wertsch (Trans.& Ed.), The concept of activity in Soviet psychology. M. E. Sharpe. pp.134-143.

0 研究概要

「本作りの現場での人工物・メディアのあり方事例調査」にご協力くださり、ありがとうございます。この調査は、本作りの現場での人工物・メディアのあり方の事例を収集・分析し、著者、編者、編集者あるいは出版社、および将来の読者というように、異なる立場の多くの関係者によって進められる本作りが、より良いものになるような方策を探ることを目的としています。2時間程度のインタビューを通じて、「(書籍名)」でのご経験を中心にお聞きします。インタビューを録音し、後ほど書き起こしますが、内容を読むのは私、高橋のみです。調査の結果は全体として、学会等で発表する予定ですが、あなたのお名前やあなた個人を識別できるような情報を公表することはありません。このインタビューでは、「(書籍名)」を題材にして、あなたが経験した人工物・メディアのあり方について、順を追って質問します。質問へのあなたの回答を通して私たちが知りたいのは、人工物・メディアの利用において、あなたが実際に何をしたか、何を考えたか、どう感じたかといった点です。あなたの一般的な行動や、こうすべきだったということを知りたいわけではありません。では、録音を開始します。

具体的なインタビューを開始する前に、インタビュー調査協力の同意書にサインを頂きたいと思います。これは、特に、インタビューの方法について、さらに、インタビューで得られた情報の扱いについて、事前に、あなたと担当者である高橋との間で同意しておきたいことです。

(インタビュー調査協力の同意書：読み上げ、質疑、サインをお願いする)

では、インタビューを開始します。

1.0 あなたのご専門は何ですか？

1.1 あなたが最近取り組んでいる研究は、どんなものですか？

1.2 「(書籍名)」では、あなたは、編者の役割について、どのように感じていましたか？そして、それは、十分に果たすことができたと考えていますか？

1.3 「(書籍名)」では、あなたは、第〇章「××」という章をご担当されていますが、この章では、どんな役割や内容を期待されていると感じていましたか？そして、それは、完成原稿で達成されましたか？

2.0 あなたが編者として、本を作ろうと思ったきっかけから、本が完成するまで、どのような出来事があったか、についてお話ししたいと思います。

2.1 何時ごろどんなきっかけや目的で、その出来事がありましたか？それにはどのような人工物やメディアが使われましたか？

2.3 その出来事について、それが始まる前の状況、その進展について、うまく運ばなかった場合にはどのようにしてうまく運ぶように努力や工夫をしたか、出来事の結末を含めて、あなたがしたこと、考えたこと、感じたことを、あなた自身の物語として順を追って話してください。

2.4 その出来事がうまく運ばなかった場合には、誰かに相談したり、その経験を誰かと共有したことはありますか？その際に使用した人工物やメディアについても教えてください。

(できるだけ順番に、思い出すことのできる出来事について、2.0 から 2.4 を繰り返す) 3.0 あなたが担当された第〇章「××」という章の執筆について、その最初の出来事から完成まで、どのような出来事があったか、についてお話ししたいと思います。

3.1 何時ごろどんなきっかけや目的で、その出来事がありましたか？それにはどのような人工物やメディアが使われていましたか？

3.2 その出来事は、うまく運びましたか？うまく運ばないという経験をされましたか？

3.3 その出来事について、それが始まる前の状況、その進展について、うまく運ばなかった場合にはどのようにしてうまく運ぶように努力や工夫をしたか、出来事の結末を含めて、あなたがしたこと、考えたこと、感じたことを、あなた自身の物語として順を追って話してください。

3.4 その出来事がうまく運ばなかった場合には、誰かに相談したり、その経験を誰かと共有したことはありますか？ その際に使用した人工物やメディアについても教えてください。（できるだけ順番に、思い出すことのできる出来事について、3.0 から 3.4 を繰り返す）

4. 「本作りの現場での人工物・メディアのあり方」について、ご意見があれば、自由に述べてください。

5. 「(書籍名)」の営業ということについて、何かしていることがあれば、ご自由に話してください。

5.1 将来の読者を、どのように想定していましたか？ そのために、どのような工夫や努力をしましたか？ 今現在はいかがですか？

6. 最後に、あなたご自身についてお尋ねします。

6.1 あなたの最終学歴とこれまでの研究者としてのご経歴（誰とどんな研究をしたのか）を教えてください？

6.2 差し支えなければ、年齢を教えてください。

7. 以上でインタビューは終わりです。ご協力ありがとうございました。後ほど、インタビューの録音を書き起こして、他の協力者のインタビューと合わせて分析します。その際に、インタビューで聞き漏らしたことがあれば再度質問させていただくことは可能ですか？ その場合の連絡先を教えてください。（名刺、電話番号、電子メールなど）

付録2 インタビューガイド 編集者出版社向け

0 研究概要

「本作りの現場での人工物・メディアのあり方事例調査」にご協力くださり、ありがとうございます。この調査は、本作りの現場での人工物・メディアのあり方の事例を収集・分析し、著者、編者、編集者あるいは出版社、および将来の読者というように、異なる立場の多くの関係者によって進められる本作りが、より良いものになるような方策を探ることを目的としています。2 時間程度のインタビューを通じて、「(書籍名)」でのご経験を中心にお聞きします。インタビューを録音し、後ほど書き起こしますが、内容を読むのは私、高橋のみです。調査の結果は全体として、学会等で発表する予定ですが、あなたのお名前やあなた個人を識別できるような情報を公表することはありません。このインタビューでは、「(書籍名)」を題材にして、あなたが経験した人工物・メディアのあり方について、順を追って質問します。質問へのあなたの回答を通して私たちが知りたいのは、人工物・メディアの利用において、あなたが実際に何をしたか、何を考えたか、どう感じたかといった点です。あなたの一般的な行動や、こうすべきだったということを知りたいわけではありません。

では、録音を開始します。

具体的なインタビューを開始する前に、インタビュー調査協力の同意書にサインを頂きたいと思います。これは、特に、インタビューの方法について、さらに、インタビューで得られた情報の扱いについて、事前に、あなたと担当者である高橋との間で同意しておきたいことです。(インタビュー調査協力の同意書：読み上げ、質疑、サインをお願いします) では、インタビューを開始します。

1.0 あなたのお仕事は何ですか？

1.1 あなたが最近取り組んでいるお仕事は、どんなものですか？

1.2 「(書籍名)」では、あなたは、編集者・出版社の役割について、どのように感じていましたか？ そして、それは、十分に果たすことができたと考えていますか？ 他の書籍などの時と比べて、違いなどはありませんでしたか？

2.0 あなたが編集者・出版社として、本を作ろうと思ったきっかけから、本が完成するまで、どのような出来事があったか、についてお話ししたいと思います。

2.1 何時ごろどんなきっかけや目的で、その出来事がありましたか？ その出来事には、どのような人が関わっていましたか？ それにはどのような人工物やメディアが使われましたか？

2.3 その出来事について、それが始まる前の状況、その進展について、うまく運ばなかった場合にはどのようにしてうまく運ぶように努力や工夫をしたか、出来事の結末を含めて、あなたがしたこと、考えたこと、感じたことを、あなた自身の物語として順を追って話してください。

2.4 その出来事がうまく運ばなかった場合には、誰かに相談したり、その経験を誰かと共有したことはありますか？ その際に使用した人工物やメディアについても教えてください。(できるだけ順番に、思い出すことのできる出来事について、2.0 から 2.4 を繰り返す)

3. 「本作りの現場での人工物・メディアのあり方」について、ご意見があれば、自由に述べてください。

4. 「(書籍名)」の営業ということについて、何かしていることがあれば、ご自由に話してください。

4.1 将来の読者を、どのように想定していましたか？ そのために、どのような工夫や努力をしましたか？ 今現在はいかがですか？

5. 最後に、あなたご自身についてお尋ねします。

5.1 あなたの最終学歴とこれまでのお仕事のご経歴(誰とどんなお仕事をしたのか)を教えてください。最終学歴では、どのような研究をされましたか？

5.2 差し支えなければ、年齢を教えてください。

6. 以上でインタビューは終わりです。ご協力ありがとうございました。後ほど、インタビューの録音を書き起こして、他の協力者のインタビューと合わせて分析します。その際に、インタビューで聞き漏らしたことがあれば再度質問させていただくことは可能ですか？ その場合の連絡先を教えてください。(名刺、電話番号、電子メールなど)

付録3 インタビューガイド 執筆者向け

0 研究概要

「本作りの現場での人工物・メディアのあり方事例調査」にご協力くださり、ありがとうございます。この調査は、本作りの現場での人工物・メディアのあり方の事例を収集・分析し、著者、編者、編集者あるいは出版社、および将来の読者というように、異なる立場の多くの関係者によって進められる本作りが、より良いものになるような方策を探ることを目的としています。2 時間程度のインタビューを通じて、「(書籍名)」でのご経験を中心にお聞きします。インタビューを録音し、後ほど書き起こしますが、内容を読むのは私、高橋のみです。調査の結果は全体として、学会等で発表する予定ですが、あなたのお名前やあなた個人を識別できるような情報を公表することはありません。このインタビューでは、「(書籍名)」を題材にして、あなたが経験した人工物・メディアのあり方について、順を追って質問します。質問へのあなたの回答を通して私たちが知りたいのは、人工物・メディアの利用において、あなたが実際に何をしたか、何を考えたか、どう感じたかといった点です。あなたの一般的な行動や、こうすべきだったということを知りたいわけではありません。では、録音を開始します。

具体的なインタビューを開始する前に、インタビュー調査協力の同意書にサインを頂きたいと思います。これは、特に、インタビューの方法について、さらに、インタビューで得られた情報の扱いについて、事前に、あなたと担当者である高橋との間で同意しておきたいことです。(インタビュー調査協力の同意書：読み上げ、質疑、サインをお願いします)

では、インタビューを開始します。

1.0 あなたのご専門は何ですか？

1.1 あなたが最近取り組んでいる研究は、どんなものですか？

1.2 「(書籍名)」では、あなたは、第〇章「××」という章をご担当されていますが、この章では、どんな役割や内容を期待されていると感じていましたか？そして、それは、完成原稿で達成されましたか？

2.0 あなたが担当された第〇章「××」という章の執筆について、その最初の出来事から完成まで、どのような出来事があったか、についてお話しいただきたいと思います。

2.1 何時ごろどんなきっかけや目的で、その出来事がありましたか？それにはどのような人工物やメディアが使われていましたか？

2.2 その出来事は、うまく運びましたか？うまく運ばないという経験をされましたか？

2.3 その出来事について、それが始まる前の状況、その進展について、うまく運ばなかった場合にはどのようにしてうまく運ぶように努力や工夫をしたか、出来事の結末を含めて、あなたがしたこと、考えたこと、感じたことを、あなた自身の物語として順を追って話してください。

2.4 その出来事がうまく運ばなかった場合には、誰かに相談したり、その経験を誰かと共有したことはありますか？その際に使用した人工物やメディアについても教えてください。(できるだけ順番に、思い出すことのできる出来事について、2.0 から 2.4 を繰り返す)

3. 「本作りの現場での人工物・メディアのあり方」について、ご意見があれば、自由に述べてください。

4. 「(書籍名)」の営業ということについて、何かしていることがあれば、ご自由に話してください。

4.1 将来の読者を、どのように想定していましたか？そのために、どのような工夫や努力をしましたか？今現在はいかがですか？

5. 最後に、あなたご自身についてお尋ねします。

5.1 あなたの最終学歴とこれまでの研究者としてのご経歴（誰とどんな研究をしたのか）を教えてください？

5.2 差し支えなければ、年齢を教えてください。

6. 以上でインタビューは終わりです。ご協力ありがとうございました。後ほど、インタビューの録音を書き起こして、他の協力者のインタビューと合わせて分析します。その際に、インタビューで聞き漏らしたことがあれば再度質問させていただくことは可能ですか？ その場合の連絡先を教えてください。（名刺、電話番号、電子メールなど）

付録4 インタビュー調査協力の同意書

インタビュー調査協力の同意書

「本作りの現場での人工物・メディアのあり方事例調査」のためのインタビューにご協力くださり、ありがとうございます。このインタビューには最長2時間ほどの時間がかかります。インタビューへのご協力は任意です。このインタビューを通じてご提供いただいた情報に、第三者が触れることはありません。また、研究成果の報告では、複数の協力者から収集したデータを統合した形で扱いますので、個人名や機関名が出ることはありません。なお、研究データに誤りがないよう、インタビューの音声を記録させていただきます。この記録は研究データとして慎重に扱います。もし、質問に答えたくない場合には、お答えにならなくても結構です。また、インタビュー調査への協力を中断したい場合には、その旨お申し出があればいつでも中断します。この同意書は、インタビューの協力者と担当者とで、1部ずつ保管します。以上の条件で、「本作りの現場での人工物・メディアのあり方事例調査」のインタビュー調査に協力することに同意いたします。

平成 年 月 日 (曜)

協力者

お名前

御所属

ご連絡先

インタビュー担当者

サイン

メディア教育開発センター

〒261-0014 千葉市美浜区若葉2-1-2

043-298-3265 高橋

—